

## ●聖なる悪女(梗概)

私は特異な環境で青春を過ごし、気がついたら三十代のシングルとなっていた。私が十歳の頃、母は夫を亡くしていた。母の実家は代々手広く事業をやっていた。母が婿養子を迎えた頃から事業が傾き、破産する。父は悲観して自殺した。母は仕事の縁で広告会社の営業マンと知り合う。その営業マンは、名うてのプレイボーイで母との浮名が流れた。母は母で、持ち前の美貌とその肢体で、男たちを虜にしていた。母は、幼少時からグラビアアイドルだった。時には下着メーカーのCMで一躍時の人となっていた。下着メーカーの御曹子でもある、営業マンは会社を辞め、私立の女子校の教師になった。そこで母と継父は再会する。そして再婚した。

継父と母の激しい性生活は、私に影響を与えていた。私は好奇心で、二人の寝室を覗きながら、自慰の快感を手に入れた。母と継父との蜜月は長くは続かなかった。母は若い実業家と駆け落ちをした。その後私は大学生になるまで、二年間継父との生活が続く。母がいなくなった後、逆に継父は私の行為をいつも見ていた。大学生になった年に、私は継父に処女を捧げていた。母と似ていた私は彼の対象になっていた。私は優しかった継父への想いが募ったが、結局彼は離れていった。

大学卒業後、私は職には就かなかった。母の残してくれた財産で、将来の生活には不安はなかった。女子大の亜希子とモデルの仕事をするようになる。画家や美大でのコスチュームやヌードと依頼は様々だ。モデル組合を主宰している、老婦人のもとに身を寄せた。女子寮での生活が始まる。マンションには時々帰る。私の秘密の空間。

二十代の中頃、桜の季節に、若者数人に強姦されかかったことがあった。私はある画学生に運よく助けられる。明夫といった。その見返りに彼は乱闘で身体が不自由になった。病院に入院したが、途中で失踪する。

一年後、上野でホームレス生活をしている明夫を見つけた。私は彼をマンションに引き取り、一年間同棲していた。明夫は熱心にスポーツジムに通い、リハビリをしていた。その時通っていた女医とやがて失踪した。同棲中、私は明夫に引かれていくのに気がついた。継父と同じような性格と体つきに病みつきになっていた。彼との性生活は私をよみがえらせた。

明夫の失踪後、私は人が変わっていた。継父と明夫を失った私は羅針盤のない海にいた。モラルや常識は私にはすでに、縁がなくなっていた。厭世観もあった。男との関係は数え切れないくらい増えていた。だが、最後の一线は拒んでいた。そのあおりで破滅をむかえた多くの男たちがいた。それを見るのが快感となっていた。人の本能の仮面は、モラルの面と隣り合わせだと気づいた。亜希子と初めての同性の経験は、新しい世界だった。男との世界も女との世界も、私には、肌の温もりはどちらも同じく感じる。その両方の世界にのめり込む自分が、この先どこまで進むのか確かめてみたくなった。私は悪女となっていた。その好奇心が私の全てになっていた。